新教出版社・新刊案内　2022 年 2 月 22 日発売

中世キリスト教の七つの時

片山 寛［著］　かたやま・ひろし氏は西南学院大学教授

A 5 判・並製・288 頁・本体 2,500 円（税込定価 2,750 円）
ISBN 978-4-400-31024-2　C1016

中世思想史から キリスト教の核心へ

神学と哲学、大学と修道院、疫病と社会。
これらの関係の中から
神についての真理を探究し、
膨大な思索を紡ぎ出してきた中世キリスト教。
教理と社会の相互関係史を探究し
その問題の核心に迫った
興味尽きない 14 編。

【目次より】

序　1　瀧澤・バルト・トマス
Ⅰ　古代末期
2　聖書翻訳がもたらした祝福と呪い――Vulgata を例として
Ⅱ　古代・中世
3　古代・中世の教理史における死と葬儀
Ⅲ　11 世紀
4　思考の開け・存在の開け――アンセルムス Cur Deus homo からトマスへ
Ⅳ　12 世紀
5　サン・ヴィクトルのフーゴー――その生涯
Ⅴ　13 世紀
6　トマス・アクィナス神学の現代的意味
7　トマス・アクィナスと自由学芸
8　トマス・アクィナスにおける観想的生活と活動的生活
9　中世哲学から学んだこと
10　ナフマニデスとバルセロナ討論
Ⅵ　14 世紀
11　「中世の秋」を生きた教会の希望
Ⅶ　15 － 16 世紀
12　「死の舞踏」の向こうに見える救い
13　煉獄をめぐる黙想――中世人にとっての死
14　知的障碍者とキリスト教